

八木義德文學裡的〈民族協和〉 —關於〈劉廣福〉及〈胡沙之花〉

林雪星

東吳大學日本語學科 教授

摘要

八木義德雖然作家歷程許久，也獲得許多文學賞，但作品卻少有人去研究。1944年上半年獲得芥川獎的〈劉廣福〉的時評裡言及，〈這是今日得正確地描寫的作品〉〈活在這個時代的精神〉，由此可清楚知道，這是預先意識到當時時局的唯一解讀法。

描寫特定滿洲人的表象作品如牛島春子的〈王屬官〉裡的王床子，〈祝這位男子〉裡的祝廉天，〈張鳳山〉裡的張鳳山。這些作品的異同與方法也放入視野裡，以〈民族協和〉的描寫為始，來探究八木義德的滿州文學的本質是本論之目的。

本論將從普羅文學轉向的作家八木義德，從〈民族協和〉的側面來探討，以自己的滿洲經驗為基礎所寫的〈劉廣福〉及〈胡沙之花〉。

關鍵字：八木義德、民族協和、〈劉廣福〉、〈胡沙之花〉、〈祝這位男子〉

受理日期：2016.09.03

通過日期：2016.10.14

**Analysis of the “Ethnic Harmony” in the Works of
Yagi Yoshinori
-Centered on ‘Liuguangfu’ and ‘Flower of Kosa’-**

LIN,Hsueh-Hsing

Professor, Department of Japanese Language and Culture

Soochow University, Taiwan

Abstract

Although Yagi Yoshinori enjoyed a long writer career and won many prizes, most of his works has been understudied. Even to his masterpiece “Liuguangfu”, which brought him the prestigious Akutagawa Prize for the first half year of 1944, the commentator said that it was "definitely the work which must be written today" as well as "the work depicts the spirit of the time" since selection. It is obvious that Yagi Yoshinori, being cautious about the situation at the war time, prepared a compromise reading.

Aside from Yagi Yoshinori’s “Liuguangfu”, there are works depicting a particular image of Manchurian. For example, Wang Chuangzi in “Wang the Subordinate”, Zhu Liantian in “A Man Called Zhu” and Zhang Fenshan in “Zhang Fenshan”, all were written by Ushijima Haruko.

This paper focuses on Yagi Yoshinori, who recanted his proletarian stance and wrote “Liuguangfu” and ‘Flower of Kosa’ based on his experiences in Manchuria. The paper highlights “ethnic harmony” issues with an aim to explore the essence of the works of Yagi Yoshinori, while the key contents and methods of writing are compared and contrasted.

Keywords: Yagi Yoshinori, Ethnic Harmony, ‘Liuguangfu’, ‘Flower of Kosa’, “A Man Called Zhu”

八木義徳文学における「民族協和」 —「劉廣福」と「胡沙の花」をめぐって—

林雪星

東呉大学日本語学科 教授

要旨

八木義徳は、長い作家歴をもち、数々の受賞作を発表したものの、作品がほとんど研究されていない。彼の 1944 年上半期芥川賞受賞作「劉廣福」も、選評のときから「正しく今日書かれなければならぬ作品」、「この時代に生きる精神」を掴んだ作品だと言われ、当時の時局を意識する読みのみが用意されていることが端的に語られている。

特定された満洲人の表象を描く作品は、八木義徳の「劉廣福」のほか、牛島春子「王属官」に描かれた王床子と「祝という男」に描かれた祝廉天、「張鳳山」における張鳳山などが挙げられる。それらの作品との方法の異同も視野に入れつつ、「民族協和」の描写を切り口として八木義徳の満洲文学の本質を探ろうとすることが目的である。

本論はプロレタリア文学から転向した作家八木義徳が、自分の満洲経験を基に書いた「劉廣福」と「胡沙の花」を「民族協和」という側面から捉えてみようとするものである。

キーワード：八木義徳、民族協和、「劉廣福」、「胡沙の花」、「祝という男」

八木義徳文学における「民族協和」 —「劉廣福」と「胡沙の花」をめぐって—

林雪星

台湾東呉大学日本語学科教授

1. はじめに

小説「劉廣福」は在満作家八木義徳昭和 19 年（1944）に創作した作品である。『日本文学者』（昭和 19 年 4 月 1 日に創刊号が初出、）に発表され、昭和 19 年上半期芥川賞受賞作になったが、選評当時に「正しく今日書かれなければならぬ作品」、「この時代に生きる精神」¹を掴んだ作品だと言われ、当時の時局を意識した読みが注目されることが端的に語られている。ただし、「満州観光」と称する「聯盟報」に掲載されていた²初稿の「劉廣福」は、『日本文学者』に掲載された「劉廣福」と異なったことは、すでに紅野敏郎³によって発表されているため、ここではあらためて言及することを避ける。八木義徳は兵隊に召集される前に「どうせ兵隊に取られて死ぬなら、その前に一つだけ小説を書いて死にたい」（『私の文学』、北苑社 1971）という決意のもとで「劉廣福」を書いたと語っていた。兵隊に行く前に悲壮な意思を持っている八木の心情が伺われる。当時やむを得ず兵隊に行くしかなかった八木は、その小さな個人の力でどうしても国家という機械に反抗するわけにはいかないため、一つの作品を描いて残したいと思って、「劉廣福」を書いたのであろう。本作は同時期の作品「胡沙の花」と戦後の「母子鎮魂」と異なり、満洲国のスローガン「五族協和」に応える「国策文学」と位置付けられた。同時期の「胡沙の花」は日本人の在満生活の暗い面が描かれていて、

¹ 片岡鉄兵（1944. 10）第 19 回受賞選評の概要 『文芸春秋』

² 紅野敏郎（2005. 12）「八木義徳の「劉廣福」—「満州観光」「日本文学」「文芸春秋」『国文学 解釈と鑑賞』學燈社 p. 178

³ 脚注 2 と同じ。

戦後の「母子鎮魂」⁴は「りよ子、史人よ」と妻と子どもに幾度も呼びかけつつ復員前後の「ぼく」の心情がストレートに述べられていく。「母子鎮魂」には、妻と子どもが三月十日の東京大空襲によって全部なくなった事実を知る「ぼく」にとっては、「戦争」とは「家が焼け、人が死ぬ」ことではなく、「自分の家が焼け自分の妻や子が死ぬ」ことに深く感じられた。

八木義徳は昭和 19 年 3 月に召集された、石川県金沢市東部第四九部隊に二等兵として入隊した。彼にとっては三度目の中国行であった。一回目は昭和 6 年（1931）、左翼運動の仲間が逮捕されたことを知り、ハルビンまで逃げたときであった。二回目は昭和 13 年（1938）満洲理化学工業株式会社の社員として奉天市に赴任したときであった。そのとき奉天市での生活を「劉廣福」と「胡沙の花」に描いたのである。

「劉廣福」の冒頭には、「劉廣福を工人として雇い入れるについては、最初から難色があった。当時私の勤めていた工場では、第一期の増産計画に対応する増築工場が一棟新しく完成したばかりのところで、これにかなり多数の工人を必要とする時であった。」（p. 63）と書いてある。すなわち、当時満洲の労働力はまだ充足していた頃であり、工人募集の方法も簡単で、「工人召募」という貼り紙を二、三枚貼っておけば、応募者が門前に多く集まってきたという状況であった。とくに「奉天の工場地帯には、満洲の奥地や北支の山東あたりから職をもとめて、大量に流れ込んできた貧農や下級労働者や苦力たちの群が、大きな隊を組んで「工人召募」という貼り紙を見つけた途端にドットそこへ雪崩込む」（p. 63）という活気ぶりであった。主人公の劉廣福はその「工人召募」に来た一人の労働者であった。劉廣福は安い賃金で力仕事、汚れた仕事についても文句一つも言わない黙々と働く吃音の大男であった。工場で火災事故が発生した際、彼の勇敢な活躍で大事故には至らなかったが、彼は両手・顔

⁴ 八木義徳（1946. 12）「母子鎮魂」（『文芸春秋』初出、1948年3月『世界社』発行。）

などひどい火傷を負い、大きな後遺症が残った。幸いに許婚者の那
娜の献身的な看病の甲斐があって、彼は退院し、二人がめでたく結
婚式をあげるといった小説の筋である。

小説「劉廣福」における語り手の「私」はフィクションの人物で、
作者の八木義徳本人ではないが、「私」の設定状況には、作者の体験
と重なり合う部分も少なくない。作者の八木も「五族協和」と「王
道楽土」をスローガンとして唱える「満洲国」には、同じ日本人出
身の工場監督としての「私」は、満人とくに下級労働に従事する満
人の間の「民族問題」及び「民族協和」をいかに見ているか、この
論文で解明したい課題の一つにする。

また、「胡沙の花」⁵には、満洲の苛酷な自然と環境に耐え切れず、
次第に萎れて枯れる「花」のように見える主人公「矢田」の妻「有
子」の痛々しい姿や工場長の家庭崩壊と自殺、「矢田」の精神の不安
定さなどが描かれる。「胡沙の花」の冒頭には「わたくしは昭和十三
年の八月から昭和十七年六月までおよそ三年十ヶ月の期間を満洲は
奉天の地に過した」(p.177)と書いてある。語り手の「私」イコー
ル「矢田」が新妻を連れて満洲のある化学薬品の工場に勤めはじめ
たのは昭和13年であった。妻「有子」はまわりの環境に溶け合えな
いせいか、「怠惰な物腰」「陰鬱な沈黙」「粗雑な言葉使い」「頻繁な
物忘れ」(p.185)になってしまい、あげくに、「精神の傾斜面をず
ずるとすべり落ちて行く」(p.185)ようになった。

前後して発表した両作品を比較してみると、「劉廣福」では、主人
公「私」は日本人の工場で働いている満人の労働者を観察する対象
にしながら、満人との「民族協和」を進めていく様子を取り上げら
れている。一方、「胡沙の花」では、主人公の妻「有子」は日本人、
満人、朝鮮人の多元的な世界に囲まれて生きながら、精神が萎れて
枯れていくプロセスが描かれている。両作品は表面から見れば、「民
族協和」と全く違う方向へ駆けていくが、「胡沙の花」が「民族協和」

⁵ 八木義徳 (1950.10) 「胡沙の花」『摩周湖・海豹』旺文社文庫版に収録され
る。

の世界を複雑に反映する一方、日本人の満洲という環境が慣れていない孤立と精神的な苦しさを反映する役割があるので、ここにもそれを考慮にして触れたいと思う。本論では満洲プロレタリア文学から転向した作家八木義徳が、自分の満洲経験を基に書いた「劉廣福」を「民族協和」という側面から当時満洲国に移住した日本人は満人のことを捉えていたかと探してみたいと思う。

2. 植民地人－劉廣福

語り手の「私」は新しく化粧品を製造する会社にフランス語の雑誌や資料などを翻訳する仕事をするために満洲国に行ったが、「重工業の急速な開発とその育成が緊急な国策」(p. 179) という現実直面した際、やむを得ず工場の管理を担当するようになった。しかし、日本国内では、「正体の分かりすぎた陳腐な日本へかえるのはもう厭であった」(p. 179) という日本国内から、「新しい世界」へ第一歩を踏み出したがっている「私」は、新妻に「早く日本へ帰ろう」と催促されても、一向に聞かなかった。それで、専務と「私」は二人で会社を作り出した。考えてみれば、プロレタリア運動に挫折に遭った「私」は、日本国内で居場所を失ってしまったので、満洲での仕事は人生を回転する第一歩のスタートになるのではないか。満洲で一転管理人になった「私」は、満人の労働者をどの視点で見ているか。

まず、工人召募の条件から見てみよう。工人を召募する際、老人と子供を除き、「姓名と年齢と学歴と前歴 (p. 65)」を尋ねるのみで詳細な「身元など調査せずに」採用するシンプルなシステムである。会社を作り始めるころ、体の丈夫な工人が欠けてはならない重要な労働力である。体力のない老人と子供を除外するが、働ける満人なら詳しい身元調査や学歴も一切考慮しないままで即採用するというニーズが高い。劉廣福は最初から「私」の特別の注意を引き起こしたのは、なぜであろうか。

つぎに、劉廣福の外見から見てみよう。「巨大な体軀」「途方もな

く無邪気な童顔」「糸のような細い眼」「大きな団子鼻」「分厚い唇」「子供がクレヨンで書いたあの漫画そっくり」「片目は斜視」(p. 65)と描かれている劉廣福は、体こそ普通より大きい、顔中の目や鼻や口などは比例にならないほどおかしい体形になっているという。その他に、「字は書けない」し、給料に「随便（いくらでもいい）」という欲はなさそうな劉廣福は、従来の応募者と大きく変わっていて、「構内の屑ひろい、水はけ、土盛り、石炭の濾し篩い、風呂焚き、他の工員たちの汚れ物の洗濯、炊事、走り使い、便所掃除、いわば雑工の中の雑工」(p. 69)という使いやすい働き者であった。身分の低い雑役ばかりで、仕事も大変だったが、なぜ大きな体の劉廣福はこのような雑工に甘えていたのか。その不釣り合いの体と仕事ぶりをみた「私」は、劉廣福という人間に気を取られて彼を観察対象にしたわけである。

満人の労働者に対しては、満人が「一銭でも賃銀が多く、そしてすこしでも仕事がラクな工場とみれば、何の未練も残さずそこへ移って行く渡り鳥のような彼等を余りにも多く眼にしてきた」(p. 72)というステレオタイプを持っていた「私」が見ると、劉廣福は満人の中にも、稀に見ない異類とは言えるかもしれない。「私」が特別な眼で劉廣福を注目しているのもそれと関わったのではないか。

劉廣福は外見から見ればほかの満人とはっきり異なっただが、「私」が見た劉廣福といえば、「檻の中の獣のように映る」(p. 70)ものか、「檻の中の獣のように立っていた」(p. 86)ことか「獣のように咆哮」(p. 80)したり「自分の唾液をなすりつけるだけで癒すというあの動物」(p. 95)だったりするように、野生的に描写されている。即ち、日本人の「私」から見た満人の劉廣福は、獣のように大きな力の持ち主や大声の持ち主である異人のようにしか見えない。しかも、「私」は中国語もあまりできないので、いかに劉廣福と意思交通をするか。それは読者の疑問になるかもしれない。例えば「怎麼樣」(どうだい)「不太離」(たいしたことはない)(p. 71)「他叫捕衛門了」(彼は警察へつれて行かれた)「他的心壞了」(彼は心が悪い)(p. 78)「我的

心壞了沒」(自分の心は悪くない(p.81))。「不太離」とはあまり使わない、正しい言い方は「沒關係」や「行」であり、「他叫捕衛門了」という言葉表現もあまりわからない。正しく言えば「他被警察逮捕了」。すなわち、「私」は半分相手の意思を想像して理解する。さらに劉廣福は吃音の大男であり、彼の哀願を聞くとき「呼吸苦しくなってくる」(P.75)、我慢できなくて劉の哀願を許したのは「私」である。

劉のほかに、「私」は工場内の、満人の派閥ができた事実について「想像以上の血縁感と郷土意識の強い彼らは、そのブロックだけががちりと党派を組み、「他郷者」は絶対にそこへ寄せつけないという意外に厳しいところがある」(p.72)と認識している。工場内では派閥が出来上がり、派閥に入っていない「他郷者」は、これらの派閥から排除され、心理的拠り所を失ってしまうのである。言い換えれば、工場という空間では同じ満洲人にとっても「血縁」と「郷土意識」で繋がっているのである。同じ派閥の人間は、内部の争いはほとんど起こらないが、違う派閥なら、お互いに拒否したり排除したりする狭い人間関係になってしまう。

錦州省出身の劉廣福は、並はずれた体格と体力、忍耐力、寡黙でしかもねばり強く、誠実な仕事の態度を買われて、満人労働者の中でもいつしかリーダー格となってゆく。一方、同じ工場で働いている古参の趙玉成は関東州派のリーダーである。同じ満人の労働者と言っても、「日本語が達者」で、「大連である機械工場に勤めていた経験がある」(p.88)人間である趙玉成なら、工人のなかで第一位を占める。むしろ工場がほしがっている働き手でもあるに違いない。しかし、「私」はいい加減な仕事の態度やささやかなことに文句を溢す趙玉成があまり好きになれない。

工場の主要原料のカーバイドが盗難された事件が起きたのは、結局派閥の争いに関わりがあったからである。派閥の闘争では、関東派の趙玉成は、錦州派のリーダー・劉廣福に罪を着せることにした。そもそも「盗み」という行為について、「満人」がそれを「必ずしも

悪ではなかった」(p.77)とし、「盗む」→「見つかる」→「返す」なら、すべての行為は一切は「帳消し」にされてしまう軽いものであった。しかし、先述べたように、欲のない人間である劉廣福だったのに、彼が盗みに関わった動機は何であろうか。確かに劉廣福は「たくさんお金がほしい」と言ったことがある。しかし、それは後で分かるように、劉廣福が結婚生活の下準備をするためである。満人には結婚する前に、婿の方は多額の「結納金」を嫁の両親に差し上げねばならない。それを「嫁」を買い求めるように見られてもしかたがないものである。劉廣福は普段の生活では、儉約しているが、結婚の話が進んでいる時、宿舎の木箱に「真新しい冬の衣類が上下揃いそろって」(p.79)、「相当高価と思われる毛布さえ買ったばかり」(p.79)、財布には「多額な現金は入って」(p.79)たという。つまり、劉廣福は許婚者・那娜のために、現金や結婚道具など全部用意しておく最中、現金や結婚道具を持っていただけに、却って盗難の嫌疑人にされてしまうはめになるわけである。

工場の関東派の工人は「他的心壞了(彼は心が悪い)」「他叫捕衛門了(彼は警察へ連れて行かれた)」(p.78)と劉廣福を嫌疑人として疑いもしなかった。「私」は劉が盗難に関わったことを「愕然」として、信じられなかった。しかし、「私」は劉廣福と面会するとき、司法主任は「自分もこれまでしぶとい罪人も相当手掛けてきたつもりだが、あいつほど頑強な奴にはまだ出会ったことがない」(p.80)どうしても盗難のことを認めなかったと語った。つぎに劉廣福への印象を「私」と劉との面会の様子を見よう。

「怎麼？」

私はもう一度言った。劉の顔は一層醜く歪んできた。それが極点にまで達したと思われた瞬間、彼はどっと吐血のように一声を吐き出した。(中略)劉は獣のような大きな掌をいっぱいを開くと、パンパンと烈しく音を立てて自分の厚い胸を打ち叩いてみせた。私は咄嗟に信じた。劉は断じて犯人ではないと。(p.81)

以上の引用文から見れば、劉の口惜しさと無力感、そして、牢獄に入れられた屈辱は「自分の厚い胸を打ち叩いてみせる」というすべて動作で表現される。「私」は「劉は断じて犯人ではない」と信じ、事件の真相の調査に着手した。ちょうどその時、隅田町の日本人経営の大きな料亭で下働きしていた劉廣福の許婚者那娜が尋ねにきた。「この女と劉廣福とを対決させてみることで何かいい結果が引き出せそうな気がした」(p. 85)と「私」は思いながら、那娜という女性を警察署の地下室に拘束されている劉廣福に面会を引き合わせた。その場面は以下のように描写される。

劉の表情の変化こそまことに観物だった。二、三歳の赤児がまさに泣き出そうとする時のあの表情の変化、眼、鼻、口とゆっくり段落をつけて彼の顔は歪んできた。彼はその顔のままチツチツと例の発音の前の苦しい舌音を打ち鳴らしながらようやく吐血のような一声を吐き終わると、こんど憚りなく声をあげて哭き出した。劉廣福と那娜……大木にとまった蟬のようであった。(pp. 86-87)

劉廣福は許婚者の那娜に会った時、まるで子供のように泣き出した。それは自分の言葉で説明できないほどの悔しさを懸命に訴えようとした仕草であろう。隅田町にある日本人経営の料亭で働いている那娜は、劉廣福と一緒にいると、「大木にとまった蟬のよう」であると「私」は述べている。結局、「私」の調査により、趙玉成の衣類から花柳病の薬とその注射代の領収書が見つかったことで、事態が大きく変わった。その金額は趙の収入に合わないほど大きい。警察で趙玉成が犯行を自供したことによって劉廣福の嫌疑は無事に晴れる運びになった。

冤罪を晴らした劉は事務室の連中から「劉！ 多々辛苦！」(p. 89)と言って迎えると、ニコニコして「没法子」と答えるだけであった。

「没法子」という言葉から見れば、ただ自分の運が悪かったと淡々とした様子で、同僚や会社に対する恨みが全然見られないようである。「没法子」という言葉は一見あきらめるように聞こえるが、実はそれは満人の生活への不満を解消するための知恵かもしれない。牛島春子の「王屬官⁶」にも満州国の農村で農民の「事勿れ主義」と「没法子」といったあきらめの心理が描かれる。

また警察署（「王屬官」には衙門に当たるところ）を「恐ろしい所」と認識した満人は、「無理なことを要求されても反抗する力は無く、言われるままの行動しかできない」「不幸や不運にまといつかれるようで、できるだけ避けていたい」という心理の持ち主でもあり、衙門となるべく交渉しないという「事勿れ主義」に徹している特徴が見られる。

しかし、警察署に五日間も身柄が拘束された劉廣福は、「貫禄」をつけて帰った人間と見通され、「彼に対する軽侮心は全く影を潜め」「畏敬の念にさえ変化してきた」（p.90）ようになった。工場での地位も動かされないほど固まっているわけである。物語がここで終止符を打ってもおかしくないのに、「工場のガスの爆発」事件が起こった展開になった。誰でもガス爆発の危険性が分かるはずであるから、皆その場に立ち竦んでしまった。劉廣福は「獣の咆哮」に似た一声を挙げて、「右脇に竹梯子を抱え、左脇には水のだらと垂れ落ちるボロ布の束を抱えて、ものも言わず機械室の中へ飛び込ん」（p.91）行った。工場で火災事故が発生したが、劉廣福の勇敢な活躍で大事故には至らなかったが、彼は両手・顔などにひどい火傷を負い、大きな後遺症が残った。

劉廣福は工場の雑工から工人のリーダーになったプロセスは、劉の黙々と働いている態度、と工人の代表として工場に哀願する有効性があるから。劉もそのおかげで自分に属する派閥が出来た。その

⁶ 牛島春子（2001.9）「王屬官」（『牛島春子作品集』日本植民地文学精選集 川村湊監修、初出「豚」という小説を『新京日報』に5月22日、23日、26日、29日、6月1日（以上朝刊）、6月3日、4日（以上夕刊）全七回刊行された。発表題（「王屬官」を著者に無断で改題したもの）

冤罪事件は全く「私」が劉への信頼から解決された。最後の火災の設定は、やはり八木義徳の理想的な満人の労働者像ではないか。工場主は日本人にもかかわらず、工場を救うために、自分の命を捨てても惜しくないという劉廣福は、実際希な存在である。

当時の審査委員の片岡鉄兵⁷は「人間のこの時代に生きる精神を掴もうとする点、何が生きる精神であるかの決定のし方においては同じである」と述べている。また、川村湊は「第十九回の受賞作は、奉天、現在の瀋陽のアセチレン・ガス工場で働いている日本人社員と、満人労働者の劉広福とのこころの交流を描いた八木義徳の『劉廣福』(中略)、それは国策や政策、社会的動向に呼応した」⁸と述べるように、「五族協和」「王道樂土」という満洲国のスローガンに沿ったこの作品にある一種の国策性が評価された側面が伺われる。

3. 「五族協和」の側面からみる満洲人

「五族協和」とは、満洲国の民族政策の標語で「和(日)・韓・満・蒙・漢(支)」の五民族が協調して暮らせる国を目指した。この民族構成も一皮むけば、少数の日本人を頂点に、圧倒的多数の漢族を底辺につくられたピラミッド支配構造で、各民族相互の交流は非常に少なかった。工場を例として説明すると、管理層はほとんど日本人で、下級労働者はほとんど満人であった。「1939年12月末の満洲国総人口は約3667万人で、うち最多数の漢族が1973万人で全体の81%を占めている。第二位は満族でその数は435万人。全体の12%を占める。第三位は蒙古族で、98万人で全体の3%弱。そして第四位は朝鮮族の93万人で3%弱、そして第五位が日本人で43万人、1%強である。」⁹即ち、五族の人口数では、日本人が一番少ない1%強しか占めていないが、各職場で重要な位置を占めている。農林牧業に従事する漢族は全体の50%を占めていて、日本人が公務員・自

⁷ 片岡鉄兵(1944.10)「第19回受賞選評の概要」『文芸春秋』

⁸ 川村湊(1998.7)「外地」と文学賞『異郷の昭和文学』p.146

⁹ 小林英夫(2008.11)「五族協和」の内実『〈満洲〉の歴史』講談社 p.210

由業が全人口に占める比率は 1.2%であった。逆最大の人口比率をもつ漢族はに農林牧業を筆頭に以下商業、鉱工業と続いている¹⁰。

「劉廣福」には語り手の「私」以外、日本人社員が出たのは二か所だけである。それは「劉は食えないぞ」「劉は曲者だ」「あいつに用心しろ」(p.76) という劉廣福にマイナス的なイメージを持っている日本人の声であった。もう一つは劉の冤罪を晴らして、工場へ帰った時、事務室の連中は「劉！多々辛苦！」と言って迎える場面であった。前者は劉にマイナス的なイメージを持たせていたが、後者は盗難事件のあと、事務室の日本人は劉に抱いたマイナスのイメージが一変した。もし、「私」は劉廣福のことを信じ切れなかったら、彼が盗難の盗人として、牢獄に入れざるを得ない。「私」は劉の保証人でありながら、上司でもある。普通、工場の環境では支配階級の工場長と監督のほか、被支配階級である大多数を占めている満人がいる。両方の考え方や見方には大きな差がある。例えば「盗み」と「賭博」を例として挙げて法概念から説明する。「彼らにとって、盗むということそれ自身は必ずしも悪ではなかった。むしろ悪は、盗んだことが見つかるというそのところにある」(p.78) という。工場で紛失した物はスパナー、鉄の帽蓋、釘、金槌や、巻尺などである。それらのものは満人の工員の木箱から探し出された。とくにカーバイドが極度欠乏する時期で、闇市では八円五十銭のものが、四十円以上の闇値には値があがって取り引きされている。

また、牛島春子の「祝という男」¹¹では、「賭博」について日本では「射幸心を刺激し、怠惰に導く道徳に反するもの」として禁止されるが、満人の社会では、「賭博はただの娯楽でしかない」「賭博は退屈な暗い長い生活を慰める唯一の楽しみ」と書いてあるように、満洲では、日本みたい深い罪悪感などは存在しないといった具合で

¹⁰ 脚注 9 と同じ。

¹¹ 牛島春子 (2001.9) 『牛島春子作品全集』 川村湊監修 ゆまに書房 (初出、『満洲新聞』(夕刊) 九月二十七日～二十九日、十月一日～六日、八日。全十回。山田清三郎編『日満露在満作家短篇選集』1940.12月、春陽堂書店)

ある。最後、衛生の習慣について見てみよう。満人は日本人ほど清潔を守らなかった。「野天で用を便ずる習慣」(p. 69)を持った彼らは、せっかく作った水洗便所を取り扱いの不慣れで、でたらめに壊してしまい、工場の構内で所嫌わず用を出すので、不衛生きわまりである。

ここで見られた満洲人は主として工場の構内にいる満洲人の労働者である。明治時代から小説の中で描かれた中国人の「無表情」「沈黙」「愚昧」といった形象に拘わらずに、八木義徳は満洲国の内部から植民地の最下層の労働者へ視線を向け細かく観察を加え、新たな形象を生み出したのである。川村湊によると、『劉廣福』における劉という人物の造形に、こうした苦力＝満人観が底流としてあることを否定するのはできないであろう。すなわち、彼らは最も人間らしい人間でありながら、社会の底辺層にいて、その存在自体が〈俺たち〉一宗主国人としての日本人ということでもいいし、最下層労働者に対する市民階層ということでもよいが—そうした主人公側の一種の精神的な底支えとなっているのである¹²⁾。』という。即ち、劉廣福のような満人がいれば、我々日本人が工場で働いていても、彼らより一層いいという安心感があるのではないか。

3.1 「胡沙の花」における日本人

「胡沙の花」には奉天の「住宅地獄」と常盤荘に囲まれている花街の環境を「矢田」の妻「有子」の精神病に繋がる事が挙げられた。橋谷弘によると、日本の植民地は「本国と距離的に近く、自然条件・文化・社会構造など本国との同質性が強かった。したがって植民地に大量の日本人が移住し、都市人口の中で日本人が高い比重を占めただけでなく、農村にもかなりの日本人が居住していた。¹³⁾」ことであり、満洲国に流れてきた日本人がかなり増えてきたので、

¹²⁾ 川村湊 (1998. 7) 「民族軋み—奉天・ハルビン・蒙疆」『異郷の昭和文学』岩波書店 p. 155

¹³⁾ 橋谷弘 (2004. 3) 「植民地都市の住民—支配と被支配」『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館 p. 69

都市の住宅難ができたのは想像できよう。ちなみに橋谷の調査した資料¹⁴によると、「1940年の満洲奉天市の人口は114万人、朝鮮の京城府は94万人、台湾の台北市は33万人の人口を擁していた。同時期の日本国内での、東京の678万人、大阪の325万人、他の大都市（京都、名古屋、神戸、横浜）でも人口は100万人前後ある」という。上の資料から日本の植民地都市の規模の大きさがいかに目立っているか伺い知ることができる。

また、植民地の京城の職業構成をみると、雑業層まで含むさまざまな職業の日本人が住み、官吏・軍人の比重は高くないという特徴は、朝鮮以外の植民地にも共通していた¹⁵。日本の植民地都市には、神社・遊廓・軍隊を欠かすことができなかつたともいわれる。

「胡沙の花」の主人公「矢田」は会社の住宅難で新妻を連れて「旅館」にしばらく泊まったが、旅行者の激増で三日以上泊まると旅館から許されなかつた。やっと見つかった下宿はもと遊廓の常盤荘から改造したいわれつきの物件である。周りに住んでいる人々は、遊廓に寄生する人間がほとんどであり、「子持ちの芸妓、女中、仲居、鴉婆、女給、妾、情婦、……。」(p.193) 女世帯を中心とする訳あり住人たちである。男といえば「料理屋の下使いの男衆か、箱丁か、下足番か、風呂場の三助か下っ端の包丁人か、流しの遊芸人」(p.193) など、生活の主権は女の手に握られているような男たちばかりである。「矢田」らの居住環境は日本人中心の社会だが、日本人といっても酌婦、娼婦、包丁人、遊芸人など雑業や花柳界の人々である。そこに住んでいる女性は日本人の警察にも見下されている。

「有子」は東京出身の女性でありながら、夫「矢田」の在郷軍人の住所移転届を出すために、警察庁へ行ったが、係の警官に「正式の妻ではないんだろう。え、だいたいあの常盤荘にはまともな女は一人も住んではおらんのだからな」(p.195) と揶揄された。常盤荘が遊廓だったためか、そこに住んでいる女たちは、遊廓に関係する

¹⁴ 脚注 13 と同じ、p.8

¹⁵ 脚注 13 と同じ、p.72

人だろうと警察のかなにもそういった偏見を持つ人が大勢いる。それは「有子」に精神的な不愉快を齎したわけである。さらに、常盤荘に住んでいる女たちは、「有子とは縁のない世界に住む者ばかり」(p.196)であるが、日常生活にも彼女らと接触せずにはいられない羽目になる。各各の部屋には炊事をする場所も設備もなく、食事の仕度にはみな「一階の台所の板の間に出てきて、そこへ十幾つかの七輪や焔炉などをずらりと並べて」(p.196)一緒にするしかない。彼女らは花街に生きている女性であるから、「有子」のような身分の違う人妻を自分の生活空間から排除しようとする。彼女らのところに遊ぶ男が来たら、騒いでいて、「隣り近所を憚る必要は少しもない」(p.197)し、酒の後の争いは「立った男が女を二階の階段から突き落とし、女の髪の毛をぐるぐると手に巻きつけて廊下の板の間を曳きずったり、物がなげられたり、刃物が抜かれたり、(中略)植民地での男女の愛憎はともに無拘束で強烈」(p.198)であったと「有子」はその住居で心細く生活している。それらの環境で「有子」の繊細な神経を一層刺激されていったわけである。

「有子」のほかに、日本人の若い工場長は満洲という「異郷」で家庭生活が乱れたことが原因で、自殺する最悪な結果となった。その工場長は新京(今の長春)へ出張するとき、愛人を連れて帰り、奉天の市内に隠していた。それを奥様にばれたため、強度のヒステリーに悩まされていた。さらに、その愛人は堂々と彼の家に押しかけて行った。ふたりの女は掴み合いの醜態を演じた。工場長は「ぼくもつくづく厭になった。いっそ女二人を殺してこっちも死んでしまったらサッパリするだろう」(p.221)と自暴自棄になり、解決できない自分の家庭問題を自殺で解決しようとした。前にも述べたように、「植民地での男女の愛憎はともに無拘束で強烈」であり、夫の不倫が明るみになっても、忍従、我慢するのは、明治以来の良妻賢母に求められることである。しかし、植民地では女性が頼れるのは夫しかいない。自分の生活の基盤が浮気の相手に乗っ取られたら、妻としての女性は今までのように忍従することが到底無理であろう。

もし、工場長の妻は忍従したら、多分「矢田」の妻の「有子」のように精神病にかかるかも知れない。

「胡沙の花」に描かれた日本人の世界には、警察に差別された花柳界の女たち（酌婦、娼婦）、その環境に慣れていない工場の管理人の妻、工場長、警察や包丁人、遊芸人など雑業や花柳界の人々によって作られた。満州という植民地で生活してきた彼らは、ほとんど周りの満州人と付き合っていないままで、自分の世界で生きている。そして、精神的な不安や階層の差別が明らかに生じてきた。

3.2 「矢田」の視点から見た満人の世界

一方、「矢田」は工場内で一番満人の世界に馴れている人間である。以下「矢田」がよく行った満人の料理屋と風呂屋を取り上げて「矢田」の認識した満人の世界を究明しよう。

「矢田」は普通日本人が行かない満人経営の小料理屋や風呂屋へ行った。満人の経営している料理屋では、大蒜や特有の脂は一般の日本人に敬遠される。しかし、「矢田」は中国の食物・大蒜や白葱、焦げ臭いにおいのする中国の酒に陶醉する。さらに、そこにいる苦力を「人間の中で最も人間らしい人間さ」(p.207)「彼らは生きている神様というわけだナ」(p.207)と「矢田」は思っている。また、風呂屋で満人の貧しい人間と富裕な満人の大人たちの生活に差格があることにも気が付いた。貧しい満人なら、風呂屋の下の池で混浴したり、富裕な人間なら一人風呂を貸切り、愛人や妓女を伴って、阿片を楽しんだりしていることも、「矢田」の視点を通して表現される。すなわち、満人の世界にも様々な階層がいて、大きな格差のある暮らしをしている。「私」は満人の「不夜城」について「驚くべき人の流れ」「茶館、料亭、映画館、芝居小屋、寄席、妓楼、およそ人間生活に必要な一切のものが余すところなくこの一郭の中に納まっている。一漢民族の密集本能と、無秩序の秩序……」(p.207)と認識したことも無理がないだろう。

以上のように挙げられた場所は富裕な満人が享受する歓楽街であ

る。「矢田」はそれを異民族満人の世界と認識したばかりではなく、満人の世界にも溶け込むことに成功した。「矢田」にとっては、「苦力というものが在る、ということで、俺たちは何となく自分に安心していられるのだ」(p.207) と思っている。「矢田」の体験には作者八木義徳の体験と重なる部分がみられる。八木の「海豹」には「じゃこ鹿」(浮浪者)として樺太へ苦力として売られたことがある。その体験があったこそ、満洲の厳しい環境に屈せずに生き生きしている。

4. 異民族への視線と身振り方

八木義徳の「劉廣福」、牛島春子の「王屬官」「祝という男」「張鳳山」、日向伸夫「第八号転轍器」はいずれも満洲に生きる日本人以外の他民族の人間を主人公とした作品である。それらの作品は満人と日本人との交渉を描いて、「民族協和」の視点から見ている作品であるといっても差し支えない。牛島春子の「王屬官」は農村の汚職した満人官吏を摘発して清潔な政治を立てる満洲国の正義な一面を訴えている。「祝という男」の祝廉天は副県長の真吉の通訳官として、いつでも「拳銃」を持ち歩きして自らの身を守っている上、「満洲国が潰れたら、祝は真っ先にやられますな」と、半ばは真面目に、半ばうそぶくような態度で上司の真吉に言った。祝は副県長の真吉の有能な部下として活躍するが、そんな彼について、川村湊は「彼はその満洲国の地方官僚としての有能さのために、自らの「民族」「民族性」を、植民者、侵略者の側に売り渡さなければならなかったのである¹⁶」と指摘している。「張鳳山」は当差(ボーイ)として参事官夫人との主従関係にあるだけであるが、極端な言い方をすれば、満人社会の底辺で働いている労働者の一人といってもよい。日向伸夫の「第八号転轍器」には旧北鉄時代のロシア式のやり方に慣れている張徳有と李連福は、効率や時刻表を厳守する満鉄式のやり方につ

¹⁶ 脚注 12 と同じ、p.157

いてゆくのがなかなか難しいのもあり、日本語での連絡ミスもかさなり、つい勤労意欲を失ってしまう状況になった。そこには時代の流れに素早く対応することのできない満洲人の老鉄道員の姿が描かれている。

以上の四作品に登場した満人は世の移り変わりを見届けている点で注目すべきかもしれない。しかし、作者は日本人であるゆえに、日本人の視点から満洲、満洲人を見たという支配者側の潜在意識が回避できない事実がある。つまり異民族の心理の中に入り込んで書いたものが少ないのは当たり前のことだと思う。ここに言及した「劉廣福」や「祝という男」などの作品は、もっぱら在満の日本人の中心にしたものであり、当然、日本人の視点から見た満洲しか登場しないわけである。「満系の作家でない限り、満洲人を主人公に、その視点、その内面的な感性をもとにして作品世界を作り上げることに、在満の日本人作家にとってきわめて困難なことだったのである¹⁷。」と川村湊が指摘したように、八木義徳の「劉廣福」に描かれた日本人会社員と満人労働者との友情と信頼は、理想的な「五族協和」の夢でしかないと思わざるをえない。

5. 結び

与えられた職務に忠実で、不平不満を言わずに黙々と働く劉廣福の素朴な態度、劉と那娜とのメルヘンチックな愛情物語、火災事故に見られる劉の犠牲心の強さと彼の生命力と回復力は、すべて「五族協和」という満洲国のスローガンに沿ったものと言ってもいいだろう。本作品は国策的な期待に応える作品と位置付けられように見えるが、実は日本人の「私」と「劉廣福」とは、支配階層と被支配階層を超えて、人間としての友情と信頼を求めているように見られる。一方、「胡沙の花」は暗い影の部分に焦点をあて、奉天の化学工場に赴任した日本人管理層役員の妻が神経衰弱から、狂気へと至っ

¹⁷脚注 12 と同じ、p. 163

てしまう悲劇や、工場長の自殺を描写したものである。八木義徳は「胡沙の花」を通して、「民族協和」を訴えるより、むしろ在満日本人の孤立や精神的な苦悶を如実に語っているのではないか。

テキスト

八木義徳（1990.3）「劉廣福」『八木義徳全集Ⅰ』福武書店

八木義徳（1990.3）「胡沙の花」『八木義徳全集Ⅰ』福武書店

参考文献

牛島春子（2001.9）「王屬官」『牛島春子作品集』日本植民地文学精選集

片岡鉄兵（1944.10）「第19回受賞選評の概要」『文芸春秋』

川村湊（1998.7）「外地」と文学賞『異郷の昭和文学』

紅野敏郎（2005.12）「八木義徳の「劉広福」—「満州観光」「日本文学」「文芸春秋」」『国文学 解釈と鑑賞』學燈社 p.178

小林英夫（2008・11）「五族協和」の内実『〈満洲〉の歴史』講談社

橋谷弘（2004.3）「植民地都市の住民—支配と被支配」『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館

八木義徳（1946.12）「母子鎮魂」（『文芸春秋』初出、1948年3月『世界社』発行。）

（付記 本論文は住友財団法人「アジア諸国における日本関連研究助成」の研究計画による研究成果の一部である。）